とある不死身の風紀委員(ジャッジメント)

Hazan=Zavah/

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある不死身の風紀委員（ジャッジメント）

【Ｎコード】
Ｎ６３１３Ｑ

【作者名】
Ｈａｚａｎ＝Ｚａｖａｈ／

【あらすじ】
――ある日、突然死してしまったオレ。気づいたら転生していて、まぁ普通に過ごせたら良いや…って思ったらとあ魔の世界？！まぁ、いっか――

このお話は、良くも悪くもはっちゃけたオリ主が原作通りに進みながらも、いろいろとぶっ飛ばすお話ですｗｗｗ

Prologue（前書き）

まぁ、プロローグです。

prologue

え…？

嘘だよな？

誕生日に死ぬってどういう事だよ？

っつーか、死ぬ時って時間がゆっくりになるってホントなんだな…

それに、なんだか不思議と楽って言うか、眠くなってきたなぁ…

あぁ、地面が近づいてきな、そろそろヤバいかもな…

ま、悪くは無い人生だっｔ〝グシャッ〟

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ…

「ん？誰のミスじゃ？この人間は、寿命ではないぞ？」

「え？いやだってこの帳簿には今日が寿命だっ…て…あああああぁ！！」

「やっぱりな…」

「ど、どどどどうしましょうぅ（泣）」

「なってしまったのは仕方がない、どこかの世界に転生させよう」

「すみません～…」

「すまないと思うのなら、正確無比な仕事しろ！まったく…もういい、持ち場に戻れ」

「はい…」

「さて、詫びとして、何かしらの能力を授けるとするか……ふむ、そうじゃのう。これが良い！これにするか…」

ｐｒｏｌｏｇｕｅ　ｅｎｄ…

第1話（前書き）

第1話、始まります。

第1話

7月16日　路地裏…

「待てコラァァァアッッ！！」
オレは一人の男を追いかけてた。
かと言って、オレにはそんな趣味は無く、単に仕事でだ。

ドゴォ！

とっさに投げた道路標識が、うまいこと当たった。

「グフゥッ…クソッ、マジツいてねぇ…」

「風紀委員だ。婦女暴行の容疑でテメェを拘束する！」

ダン！

カシャン！

「ッテェな！大た「あーハイハイ、言い訳は後で聞くから黙ってろー」
ドスッ！

〜♪〜♪

ん？黒子からか
ピッ！

「もしもし？オセロ（白黒）ちゃん？」

「だから！オセロは止めて下さいと言ってるんですの！涼一さん！」

とある魔術の禁書目録＆ａｍｐ；とある科学の超電磁砲　ＳＳ
【とある不死身の風紀委員】
第１話［炎天下の中、ご苦労様です♪］
Ａパート

「えー良いじゃんよー、こっちのが呼びやすいし…で、ソッチは終わったか？」

「まったくもう…こちらもちょうど拘束した所ですの、涼一さんは今どちらに？」

そう言われ、別の端末で位置確認をする。

「んと、お前さんが居る路地の一つずれたとこ、ちょっと待ってろそっちに向かうから」

「分かりました。では、後ほど」

「おう」

プツッ！

ツー…ツー…

「さてと、可愛い後輩にどやされない内に行きますかね！」

そう言いながら、オレはいつの間にか気絶してた犯人を引きずりながら行った。

…

…2分後

「待ったー？」

「いえ、それほどでは」

「いやそこはお前、”ううん、今着いたとこっ（はあと）”みたいなk「くだらないこと言ってないでさっさと警備員（アンチスキル）に通報して下さいな」…オセロちゃん冷たい…」

「そういや、襲われた女性は？」

「ああ、それでしたらお姉様のこと「黒子ー？もう終わったのー？」
…ですの」

「ビリビリちゃんだったのね…なるほど、だから”ツいてない”、
ね…」

「「？何のことですか（の）？」」

「や、こっちの話」

「「？？？」」

「それよかビリビリちゃんは、どーしてここに？」

「え？！い、いやーなんか成り行き？みたいな？っていうか、ビリ
ビリは止めて下さいよ涼一先輩！」

「そんなにオレの付けるあだ名は嫌なの？嫌なら止めるけど」

「まあ、出来るなら」

「あ、オセロちゃんは例外な」

「なんでですの！？」

「ま、こんなとこじゃなんだ、そろそろ移動しますか」

「ちょっと!?無視しないて下さいですの!?」

「嘘だよ、機嫌直せって黒子ちゃ〜ん（笑）」

そう言いながらオレたちは警備員に任せ、その場を後にした。

Bパートに続く…

オリ主　紹介（前書き）

オリジナル主人公の紹介です。

随時更新する予定です。

オリ主　紹介

名前
保科（ホシナ）　涼一（リョウイチ）

性別
男

年齢
１６

レベル
無能力者（レベル０）判定

性格
良くも悪くもはっちゃけた性格。
好きなモノ好き、嫌いなモノは嫌い、とはっきり言える。でも言わない、その方が楽しいからｗ

身長　１７８ｃｍ

体重　５８ｋｇ

容姿
髪型はメルブラの七夜っぽい感じ。髪色は烏の濡れ羽色。瞳の色は鈍色。
１０人中７人が振り返るぐらい。

能力
臨死復元（ニアデスレストア）
：即死、及び致死量のダメージを受けた時にのみ発動。
負傷した所から復元される。復元速度はダメージ量による。
再生でも治療でもなく、あくまでも〝復元〟なので痛みが残る。

Bパート（前書き）

更新が遅くなりがちになります？
それでは、Bパートをどうぞ！

Bパート

唐突だが、オレこと”保科　涼一”は、いわゆる前世の記憶、とやらを覚えている。
別に中二病的な意味合いではないぞ？本当の意味でだ。
いや、確かに生前はオタクだったけどね？

おそらく転生者、という部類に入るのだろう。死ぬ直前までの記憶があるし。
ちなみに前世で死んだ原因は、心臓麻痺により足がふらつき、マンションの屋上から真っ逆さまに転落。享年　２４歳…
ハハッ…笑っちまうだろ？

んで、目覚めてみれば赤さんになってて、混乱しながらも二度目の人生も普通に過ごそうかね？…と、そう思った矢先に能力が有ることが分かり、ここ”学園都市”に来た。学園都市、という単語でとあ魔の世界だってのはすぐに分かった。
一応原作読んではいたし、超電磁砲も見てたし。

まあ、閑話休題（それは置いといて）

オレは今、黒子と御琴と一緒に朝の通学路を歩いてる。

「ふあぁ…ったく、朝っぱらから走るとは思わなかったぜ…」

「あら、涼一さんは朝、遅めの方でしたの？」

「いや、この時間にはもう起きてて、弁当作ってメシ食ってちょっとゆっくりして、登校するってゆう流れ」

「意外ですね…涼一先輩が料理するなんて」

「そうですわね…いつもコンビニか購買で済ませてそうなイメージですものね」

「お前らが今までオレの事をどんな風に思ってたかよーっく分かったわ…」

「いや、だって…ねぇ？」

「ですの…」

「ちくせう。…ま、言ってなかったオレも悪かったか…そうだな今度何かご馳走するよ！」

「…へ？い、良いんですの？」

「ああ、一人や二人で食うよか、大勢のほうが美味いしな！」

「でも、大丈夫なんですか？食費とか私たちも出しましょうか？」

「全然問題無ぇよ、バイトしてるから少し余裕有るし！」

「そういうことなら、お言葉に甘えさせていただきますの…」

「じゃあ、都合がついた時に連絡くれよ！っと、こっから真っすぐ行けるな。んじゃ、また放課後な～黒子ちゃん！」

「あ、はいですのー！」

そう言ってオレは足早に学校へ向かった。

……途中背後で”ちぇいさー！”って聞こえたが、気にしないことにする。

タッタッタッ…ガラガラッ！

「セーフ！？セーフ！？」

「面白さ的にはアウトだにゃー、ほっちゃん。後、おはようだぜい」

「な、なんだってー！…ま、良いや。おはよーさん。つちみー、青ピ」

「おはようさん、ほっちゃん」

「ありゃ？そーいや、当麻は？」

「来てへんよ、まだ寝てるんとちゃう？」

「まあ、上やんだしな…」

「だなぁ…」

そして案の定、当麻は見事に遅刻した。３分…もうちょい頑張れば良かったものを…

その後も授業は、だらだらと進み放課後…

「おっし！今日は付き合えるか？涼一」

「あー…　悪ぃ、当麻。今日も巡回なんだわ、これがまた」

「今日もかにゃー？ここ最近ずっとだぜい、ほっちゃん」

「人手不足、だってよ…ったく、こうも連続だとさすがに参るよ…」

「ホンマ、お疲れさんやで。ほっちゃん」

「まぁ好きでやってるから、良いけどね…っと、んじゃ！また明日なー！」

「おう、また明日な。涼一」

Bパート（後書き）

これから、更新不定期になるやも知れんです…

それでも頑張って執筆するので、これからも応援ヨロシクです！

第2話（前書き）

今回は少し長めかも？

それでは第2話、どぞどぞですー

第2話

「これは、飾利ちゃんが好きだったな、こいつは…一応買っとくか」

「っと、アブねアブね。危うく買い忘れるとこだったわ」

オレは当麻たちと別れた後、支部のやつらのために差し入れを買いにいった。

「さて、そろそろ行きますか」

【とある不死身の風紀委員】

第2話「日常とか非日常について回るテンプレ的なアレ」

ー風紀委員第一七七支部ー

ピピッガチャ

よし！いつも通りにギャグを交えて…！

「待たせたな」（某固体の蛇風に）

「あはは…あまり似てないわよ？涼一君」

そこには、同じ風紀委員の同僚である“固法　美偉”が居た

「んー手厳しいねぇ…美偉ちゃんは、ほい差し入れ」

「ありがと。あれ？私、涼一君にムサシノ牛乳が好きって言ってたっけ？」

「言ってはいないけど、行動で丸分かりなんだよ。ゴミ箱には大量のパック、冷蔵庫のストックがそろそろ無くなってきてたし…おのずと分かるさね」

「あ、そっかぁ…なるほどなー。すごい洞察力ね、相変わらず」

「洞察力って言うほどのモンじゃないよ。誰でもできるさ」

カチッ
シュボッ！…
ジジッ…

「フゥー…あぁーやっぱタバコうめぇ」

「あ、コラッ、部屋の中で吸わないの」

「いーだろ別に、空気清浄機やってるし窓開けてるし」

「むー…それもそっか」

「ってーか、ツッコむ所そこかよ？」

「もう注意するのも諦めたし、だいいち貴方〝オレは許可されてるからいーの〟っていつも言うじゃない」

「まあな（笑）」

「それで？さっきの続きは？」

「え？あぁ、あれか。ま、簡単な事だよ、あらゆる物事をすこーし注意深く見ること」

「それだけ？」

「後、疑問を感じたらその疑問を突き詰めていく。そうすりゃ、納得のいく答えが出てくるんだ」

「へぇー」

「ま、オレの持論ですけどねー」

「それってやっぱり、長いこと風紀委員をやってて？」

「それもあるかなぁ…」

「ふぅん…さすがに最年少学区長の言葉！含蓄があるなぁ」

「茶化すなよ、そう自慢できることじゃあないさ」

「そうかなぁ…？」

「そうさ」

「フフッ」

「何さ、そのニヨニヨしたツラは…」

「ゴメンね。でもさ、涼一君ってあんまり自分のこと話さないでしょ？それでね」

「そうか？あんま自覚は無いからわかんねーや」

～♪～♪

「ん？」

この着信音は…

画面を見ると、予想通りに“親船　最中”の名前があった。

ピッ

「はい、もしもし」

「涼一君？今、大丈夫ですか？」

「はい、問題ないですよ最中さん」

「では、用件を伝えます。今日の完全下校時刻の後、そちらに伺います。宜しいですね？」

「分かりました。夕食の用意をして待っています♪」

「それは楽しみね、期待しているわ」プツッ…ツー、ツー、ツー…

今日の夜位に来るってことは、十中八九バイトだな、今日は。

「ねぇ、涼一君。さっきの電話って？」

「ん？あぁ…お世話になってる先生が今夜、来るんだ」

「ふーん…あ、そろそろ巡回の時間だね？行こっか？」

「そうだな…早いとこ黒子ちゃん達と合流しとかないとどやされっちまう」

「確かに…フフフッ」

「何さまた」

「いやね、涼一君が白井さんに怒られてる姿が容易に想像出来て…」

「ひでぇ」

「クスクス…冗談よ」

そうして、オレは未だに含み笑いをしている美偉と共に、巡回に向かった…

……Bパートへ続く

Bパート（前書き）

職探しとか引っ越しとかで大幅に遅れちゃいました；

のわりには文章が拙かったりしちゃったり…

あ、後ちと原作ブレイクやキャラ崩壊が有りです。

ではでは、Bパート始まります。

Bパート

保科涼一と固法美偉の関係性を表す言葉は不思議とたくさんある。

学園都市の尺度で言えば、「同級生」。

風紀委員の中で言えば、「仲の良い上司と部下」。

同級生達からは、「まるで夫婦のような恋人同士」みたいと言われる始末。

最後の一つには、オレも美偉も笑ったが。

ただ、どれも間違ってはいないと思う。聞いていてなんとなく納得いったし。

けれども、一番正しくかつ最も適切な表現が有るとすれば。

「暴れるペットとその飼い主」

これが一番しっくり来ると思う。

その理由は後ほど分かるだろう。

ま、とりあえず閑話休題（それは置いといて）

オレと美偉はいつも通りの自販機のある公園で待っていた…

「むぅ…しまった」

「どうしたの？」

「タバコ持って来たのは良いけど、火ィ持ってくんの忘れた…」

「ちなみに聞くけど、灰皿は？」

「あるよ…見事にライターだけ忘れた…ちくせう」

「まったく、変な所でドジなんだから…はいコレ」

そう言われて、青みがかった銀色のオイルライターを渡された。

「あれ？コレは…」

「そう、涼一君から2年ぐらい前に貰ったモノだよ。」

思い出した。

確か2年前の“あのとき”にいろいろあってあげたモノだ。

「へぇ…懐かしい……良くメンテされてんな」
と言って一通り見た後、美偉に返した。
「え…？つけないの？」

「んーん、つけるけどさ…ソイツは美偉ちゃんのモノだから美偉ちゃんがつけて♪」
「ふぇ？…い、いいい、良いの？」
「良いから良いから♪ほら！」
そう言って、タバコを口にくわえる。

「そ、それなら…はい…／／／」
自然と距離が縮まる…

カチッ…
シュボッ！
…ジジッ…
カ…チン…
「スゥーッ、フゥー…うん、ありがとう」

「ど、どういたしまし…て／／／」

「ん？顔赤いよ？どったの？」ニヨニヨ

「な、何でも無い！！／／／」

やっぱり、弄りがいがあるな。美偉は…

つくづくそう思うオレだった…

ｓｉｄｅ－美偉－

ニヨニヨしてる…／／／

う～／／／

あの顔は絶対分かってて言ってるよ～…

そういうとこがまだまだ慣れないなぁ…

…でも、あんなに涼一君と密着しちゃった…／／／

ハッ！落ち着け…平常心、平常心…！

こんなにテンパってるとこ、白井さん達には見せられないよぅ…（涙目）

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ…

「ん？あれか？」

ぼーっと、半分ぐらい吸っていた時に前方に見覚えのあるツインテールを発見した。

「お待たせしましたの…ってぇ！まぁーた吸いながら待ってたんですの！？涼一さん！？」

「いーじゃねーかよー、暇だったしさー、勘弁しておくんなまし黒子ちゃん」

「まったくもう…！」

「で、そちらのロングヘアーの娘はどちらさん？」

ま、知ってるけどね…

「えと、どうも。あたし初春と同じクラスの“佐天　涙子”っていいます！」

「おぉ！元気な娘だねぇ。そっかぁ飾利ちゃんの友達かー…っと、オレは飾利ちゃん達と同じ風紀委員の保科涼一だ。よろしくな！」

うむうむ、原作通りに元気いっぱいで可愛らしい娘だ。

ん？

「あれ？飾利ちゃんどったの？デッカいマスクして」

「ゴホッ…ちょっと風邪気味でして～…」

「あちゃー…どれ、デコ出してみ」

「へ？あ、は、はい！」

ぴと…

「んー…ちっと熱はあるか…今日は、大事をとって休みなさいな」

「うにゅ…はい…」

「巡回の途中で、寮に送るから。な？」

「わかりました…すみません…」

「良いって良いって！しゃーねーさ。んじゃ、行きますか」

そう言い、タバコを消す。

――――

巡回もそこそこにブラブラしていた時、ふと違和感を感じた。

「あれ…？」

「一体どうしたんですの？涼一さん」

「あそこ…平日なのにシャッターが閉まってるなぁって」

「休業なんじゃ？」

「いや、あそこは確か休業日は日曜だったはず。臨時休業だとしても張り紙の一つも無いのは、おかしい」

それに、なぁんか、

「嫌ーな予感がするんだよなぁ…美偉ちゃん。一応、透視てくれないか？」

「分かった。ちょっと待って……ビンゴ、中に黒いジャンパーを着た不審な3人組がいるわ」

「あちゃー…強盗か、立てこもりか、どっちにしろメンドイっす…書類的な意味で」

「確かに…ですの」

「わかってくれるか…黒子ちゃん」

「もう…！しっかりしてよ二人とも！！」

「「へーい…（ですの…）」」

「んじゃ、オレが先行すっから黒子ちゃんは状況を見て拘束。美偉ちゃんは三人を比較的安全な場所に退避な」

チョイチョイ

「ん？……何さ美琴ちゃん。その、期待に満ちあふれた、目は」

「わ、私も手伝いたいなー…なんて、エヘヘ」

「エヘヘなんて可愛い声出してもダメなモンはダメだって言ってるだろ？超能力者（レベル５）とはいえ、一応は一般生徒なんだから…な？」

「は～い…わかりましたよぅ」

「ほいじゃ！お仕事、お仕事！」

気持ちを切り替えていざ、現場へ――

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ…

ドガァーーーン！！

爆発音

涼一「へ？」

人間は、予想外の事態が起これば呆然とする。
涼一もまた、その例には漏れなかった。

ーーー瞬間。
バスッッ！！
シャッターの破片だろうか、何かが涼一の鳩尾辺りに刺さり、吹っ飛ばされるーーー！

御坂・初春・佐天「涼一（先輩）（保科さん）！！」

そんな中、白井黒子は上司でもあり先輩でもある保科涼一の命令を忠実に守っていた。
何故なら、彼女は知っている（・・・・・）から。
彼は、
「保科涼一」という人物は、
“あの程度”じゃあ、簡単に殺されはしないから。
“あの程度”じゃあ、彼は、死ねない（・・・・）から…

だからこそ、彼女は高らかに名乗り上げた――！

黒子「風紀委員（ジャッジメント）ですの！」

…ｓｉｄｅ　涼一

あー…クソ…痛ってぇ……

あれ？

そう言や、美琴ちゃん達はオレの能力知らないんだったっけ…

怖がらせちまったな…

さてっと、黒子ちゃんは上手くやってくれてるかな？

…ふむ。

一人確保に約５秒ってとこか？

うん、上々だな。

っし、オレもそろそろ動くとしますかね…

「オラァ！これでも喰らいやがれ！」

ゴゥ！

！…発火能力者（パイロキネシスト）か。
なら――――！

「せぇ……のぉ！」

バヂッッ！！

シュゥウ…

「あぁ？こんなチンケな火でどうにか出来っと思ったのかぁ？」

タバコの火にすら劣るね

「な、なんで…何で効かねえんだよ…！」

バーカ。だーれが教えるかってんだ

「知るかよぉ。ったく、人の土手っ腹に穴ぁ空けやがって…覚悟は出来てんだろうなぁ！」

瞬間、走り出し――

腹から引き抜いた（・・・・・・）シャッターの破片で、

「なっ！」

ドゴォ！

ーーーぶん殴った。

「グアッ…！」

ガチャン

「強盗の現行犯で拘束、ってな」

「が…畜生…！」

「さて、残りは一人…あれ？どこ行った？」

そうして見渡してみると、残りの一人が逃げようとしていた所だった。

止めようとしていた涙子ちゃんを蹴って。

その様子を見た瞬間。

考える事を止めた———

side　黒子…

佐天さんが逃げる強盗犯に足蹴にされた時、

“終わった”と思った。

こちらが。ではなく、相手の方が。だ。

そして、涼一さんは俯いたまま、私に声をかけた…

side　out…

side　涼一

思考が切り替わっていく———

「おィ、黒子ソイツを寄越せェ」

あァ…もうダメだァ。

アイツはやっちゃならねェ事をやっちまった…

ヒデェ目に遭わねェと分かンねェらしい。

「え？…でも…」

「二度は言わねェぞ」
そう言いながら、オレはたった今拘束した奴を黒子の方へと投げる。

「っ！は、はい！」
オレは、テレポートされてきたデブを掴み、道路の真ン中に立った。

車がＵターンしてこっちに向かって猛スピードでやって来る。

自然と、

体中に力がこもる。
脚を踏みしめる。

道路がひび割れる（・・・・・）が気にしない。

こンなの（・・・・）は日常茶飯事だァ、

バケモノのオレにとっては…
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ…

ふと、思い出したように強盗犯の一人が呟いた。

強盗犯Ａ「き、聞いた事が有る…一度捕まったら最後、身も心もボロボロにされてしまう…最悪の空間移動（テレポーター）能力者が居るって…」

黒子「誰の事ですの？（怒）」

黒子達が会話している間にも、涼一は次の行動に入る。

強盗犯Ａ「そしてその空間移動（テレポーター）能力者の上司で、見つかったら最後、諦めるしかなくどんな能力も効かない“最恐”の風紀委員（ジャッジメント）が…」

涼一は思い切り腕を振りかぶり、車の真正面に向かって――

黒子「そう。あの方こそ、無能力者（レベル０）でありながら、最年少の学区長にして警備員（アンチスキル）が一目置く存在。それが、『保科　涼一』さん。通称“不死身の風紀委員”ですの♪」

掴んでいた強盗犯を、ぶつけた―――

ｓｉｄｅ　涼一

衝突により急停止する車。

「さァてとォ、テメェはオレの前でやっちゃならねェ事をしたァ」

車に近づき、ひしゃげたドアをこじ開ける。

「女の子の顔を傷付ける、ましてや蹴りくれるなんざァ…オレにとっちゃ許せねェ事なンだよ…」

そう言い、犯人を引き倒す。

そして足を振り上げ、顔をめがけ、踏み―――

「涼一君、ダメぇ!!」

―――外した。

足は、顔の数cm横にずれて地面を踏み砕いていた。

「チッ、ンだよ。美偉、邪魔すンじゃねェよ」

「確かに許せないけど…それ以上は、ダメだよ。ね?」

「ハァッ…チッ、わァったよ!」

オレはそう言って、そのまま拘束してそこらへんに転がす。

「…ツいてンな、アンタ」

オレはそう言って、タバコをくわえ、美偉のもとへ向かう。

「ン」

「はいはい（笑）」

美偉は苦笑を浮かべながら火を着ける

ジジッ…

カチン

「フゥーッ……なァ、美偉」

「何？涼一君」

「あァ、なンだァ、そのォ…悪ィ。それと、あンがとな…」

「？変な涼一君。フフッ」

まったく…天然なのかわざとなのか、時々読めねーんだよなぁ…

それはそうと

「っと、涙子ちゃん大丈夫かい？」

「え、あ！はい！ちょっと顔を擦りむいただけです！」

診る限りには、けっこう軽いほうか…

「ちっと待ってな、応急処置すっから」

そう言ってオレは、カバンからティッシュ・飲料水・消毒液・絆創膏を取り出して処置を始める。

「ほ、保科さん！？」

「ほれ、じっとしてなって。…ちとしみるぜ」

水を含ませたティッシュで汚れを拭き取り、次に消毒液を含ませたティッシュでサッと拭く。

「ヒグッ！～～～！！」

「後は絆創膏を貼って、と。ほれ、終わったぜ！良く頑張ったな…」

労いとたしなめる意味もこめて頭をグリグリと撫でる。

「うぇ?!あああ、あ、ありがとうご、ございます…!」

「けど!…もうあんな無茶すんなよ?内心ヒヤヒヤしたからなぁ…」

「あぅ…はい…ごめんなさい…」

「分かればよろしい!、なーんてな♪」

オレは踵を返し、面倒くさい事後処理の事を思いタバコに火を付けた…

Bパート（後書き）

……

こんなモンでどうでしょうか…？

ちなみに、固法先輩を涼一君の同級生にしたのは、単純にその方が動かしやすかったからですｗｗｗ

お姉さん系期待していた方はスイマセンｗｗｗｗｗ

その他、意見・感想があれば是非是非コメントして下さいな…お待ちしております♪

第3話（前書き）

やっと書けた…！

バイトの面接とかでいろいろ忙しかったわけでして…

という訳で第3話、始まります。

第3話

「しっかし、相変わらず派手にやるじゃんよ。お前は」

「いーじゃねぇっすか別に…好きで壊してるワケじゃあるまいし…」

「コレがわざとだったら、なおタチ悪いじゃん…」

「ですよねー…」

「ま、今回は理由が理由だし大目に見るじゃん。」

「お！さっすが愛穂（あいほ）センセー、話が分っかるぅ♪」

「ただし！…今回だけじゃん、涼一」

「ワカッテマスッテ！ＨＡＨＡＨＡ！！」

「気のせいか？棒読みっぽいじゃん…」

そんなワケでオレは今、事後処理という名の後片付けをさせられて

る。

まー、結構派手にやらかしたからねー…

さて、後は…っと。

「「「…」」」

こちらをじぃっと見つめる3組の眼差し。

こっちの方も処理しなきゃあ、な…

【とある不死身の風紀委員】

第3話「説明ってヤツぁ、聞くのは簡単だけど、するのはなかなか難しいよね」

「待たせたな、お前ら。んじゃま行きますか」

「ええ、そうね…涼一君に“聞きたい”事もあるし…」

うっ…まぁしゃーねーか、詳しくは話して無いからなー…

「はぁ…分かったよ、いつもの公園で良いか？」

そうしてオレ達は、いつもの自販機がある公園へと向かった…———

「それで？まず何が聞きたいんだ？」

「じゃあ聞くけど、あの時なんでシャッターの破片が刺さっても平気だったの？」

ま、当たり前だわな。

「ああ、それなら簡単だよ。単純にオレの能力だからさね」

「え？でも無能力者なんじゃあ…」

「たとえレベル０でも、カリキュラムを受けていればＡＩＭ拡散力場は発生するんだぜ？涙子ちゃん」

「あ…そっか」

「じゃあ、レベル０の肉体再生（オートリバース）が涼一先輩の能力なんですか？」

「美琴ちゃん惜しいね！正確には臨死復元（ニアデスレストア）っつー能力だよん♪」

「「「「？？？」」」」

あり？黒子ちゃん以外みんなキョトンとしとる？…黒子ちゃん、ま

さか…

「まさか、黒子ちゃん？」

「そのまさかですの。あまり言う必要が無かったかと思いまして」

「…んで？本音は？」

「私も、あまり詳細を聞かされてないからこれを機に、と」

さよですか…だからってコレは無いだろう？

ま、いろいろ端折りますか。

「えぇとだな。とりあえず簡単に言っちまえば、“異常なまでに死に難い”能力…なんだと」

「死に難い？」

「そう。身体が即死及び致死レベルのダメージを受けた時点に発動して、そのダメージを文字通り“復元”するんだよ」

「そんなにすごい能力なのに、なんでレベル０なんですか？」

「まぁ、単純な問題だよ。ダメージを受けなきゃ発動しない能力だからね。身体検査（システムスキャン）にも引っかからないってワケさ」

「その証拠にホラ、腹の傷が塞がってるだろ？」

「「「「ホントだ…」」」」

４人は揃ってオレの鳩尾を凝視する。

ヤダ…／／／そんなに見つめられたら…

まぁ、どうにもなんないけど。

それよりも…

「ハァ…このシャツ結構気に入ってたんだけどなー…」

「ご愁傷様ですの」

「他人事だと思って…」

「他人事ですもの」

そう言って、クスクスと笑う黒子。

「あ、後もう一つ有るけど良い？」

「ん？何さね美偉ちゃん」

「犯人が重かったとはいえ、車を中破させる力なんてどうしたの？」

…っ、アレか。

「んー、そりゃお前さんアレだよ。鍛えてますから！」

嘘だ。
だけども吐かないといけない嘘だ。
コイツらを騙すようで悪いけれど…
しょうがない。

「ふぅん…なるほどね、納得だわ」

「さて、質問は終わりかい？そろそろ巡回も切り上げて、お前さんらを送っておかないとな！」

「そうね、そろそろ時間も良い頃だし」

「え？あの…アタシも良いんですか？保科さん」

「おおっと！そいつぁ、野暮なハナシってヤツだぜー、涙子ちゃん」

「事件に巻き込んじまった一般生徒をそのまま帰らせたら、オレが上から怒られちまうし、何より…」

「何より…なんですか？」
涙子ちゃんが不思議そうに聞いてくる。

「女の子を一人で帰らせるなんて、オレの男が廃る。ってね」

そう言ってニヤリとした笑みを見せる。

「へ？」

涙子ちゃんは呆然とした表情でオレを見上げた後…

「あ、あははっ！じゃあ、よろしくお願いしますね！」

可愛い笑顔でそう言うのであった。

Bパートに続く…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6313q/

とある不死身の風紀委員(ジャッジメント)

2011年9月26日17時28分発行